

第五章 叙想法の用途 及びその動向

17. 序説及び分類 屢述べた様に、此叙法の職能は或事柄を現實界のものとしてではなく、言者の腦裡に描かるゝ想としてか、又はそこに反映せらるゝ想として述ぶるにある。勿論それは單純なる想念事項である場合もあれば、他人の説話によつてそこに植付けられた想なることもあり (§14 參照)、又、既に現實界に存在し、又は存在した事實を、吾々の念慮に寫して、想として取扱ふ場合もある (§11 參照)。而して、英語の叙想法は、これをその語形の歴史から言へば希臘語等の Optative Mood の系統に屬するものであることは前述の通りであるが、その意義内容から言へば、これ亦既説の如く Optative Mood と Subjunctive Mood との合流混淆したものである。而して、希臘語等に於ける Optative 及び Subjunctive の兩叙法があつた通り複雑な意義内容を有したものであり (§8 參照)、それは主觀的叙述の殆んぞ全部を蔽ふことへ言はれ得るものである (§11 參照) が故に、たゞ英語が殆んぞ凡ての言語の辿つた道程を経て變遷し來り

今日では叙想法の領域が著しく狭められ、その昔叙想法の用ひられた場合に叙實法の使はるゝところが極めて多くなつたさはいへ、尙、その用途が可なり廣汎な區域に亘り、複雑であるさも考へられ得る程度のものであるここに不思議は無いであらう。況んや、英語の歴史に即して忠實なる觀察を下すならば、その昔の叙想法が衰頽したのには、そこに他の重大なる原因もある⁽¹⁾が、然も又、極めて大なる程度に於いて助動詞の發達と並行するものであり、畢竟それは英國人の文化が進歩して思想の分析が緻密になり、内容の空漠たる純叙想法ではその思想の中に存する微細なる區別が表はれないので、その缺を補ふものとして助動詞の用法が發達したのであつて、助動詞を有する句動詞は、その分析せられたる意味に於いて古の叙想法の職能を繼承するものである (§4 參照) が故に、此叙法の研究者は、須らく心眼を開いて古今の展望の利く地位に立ち、全體の動向變遷をその相關聯するがまゝの姿に於いて觀察するだけの用意が無くてはならない。此意味に於いて、Tense 論の場合に於けるさ同様、私は再び Jespersen さは著しくその見解を異にするものであつて、吾々は言語の歴

(1) 此處に他の重大なる原因といふものに就いては 215, 52 等參照。

史を究め、過去より現在への變遷移行の跡を釋ね、そこに貫通する脈絡を把握しなくてはならないことを主張する。故に、私の此叙法に關する研究は頗る複雑なる對象を有することになるが、若し幸に斯の如くにしてその全部を闡明することが出來たならば、英語の動詞の叙法は過半、若しくはそれ以上、これを明瞭にすることが出來るであらう。何故なれば叙實法と雖も、その内容は決して單純なる叙實の具ではなく (§§ 14-6 參照)、「叙實」、「叙想」の兩叙法は、吾々古來の慣例に従つて便宜區別して觀察するものゝ、又、此兩叙法の極端と極端との間には著しき差異が存するものゝ、此兩者は決して對立的位置にあるものにあらずして、並列的關係にあり、然も、その兩者の間には斷つべからざる共通な生命の糸筋が流れて居るものたることを認めなければならない。Jespersen の如くその一方を餘りに輕視することも決して妥當なる理解に導く所以でないが、兩者を全然別箇の範疇に屬するが如くに見る一切の學者は、子音と母音とを全然別箇のものゝ如くに考へる音韻學者の如く、到底眞箇の理解を呼び起さないであらう。かくて、私の此叙法に關する細論は、これを徹底的に進むるならば、勢、他の叙法にも觸れなければなら

なくなる。但、本書に於いて私が以下に説かんところ、此叙法の職能論にはあらずして、寧ろ幾分にては現下の我が國の英語學界に必要な思考せらるゝところに副はんとするものであるが故に、主として近世英語に於ける此叙法の用途を記述し、ゆくゆくその動向を觀察し、以て現代に於ける實際現象を知ることを以て主目的とする。只夫れ、眞の理解は斯の如き記述のみを以てその通達を望むべくもない。故に必要な應じては所々に私の理論を編み込んで全體の統合に力め、又、その見透しを得んが爲の説明を試みるが、讀者幸に先行の各章に論じたところを參酌して明察を加へらるゝならば、以下の記述も死文字に終らないであらうことを庶幾する。俗、英語がその昔有して居た、頗る廣汎に亘り空漠たる意義内容を有した叙想法は、文化の進展につれて當然さうでなければならぬ様に、幾多の小別に分析せられて變遷の道を辿り來り、又、移行して行くものである。故に近世英語に於ける實情を認識せんが爲の記述文法に於いても、必ずその分化の跡を辿るだけの用意がなくてはならない。そこで叙想法の分類を稱する要件を生ずるのであるが、私はこゝに私案として次の三綱を立つるを以て便利とする。即ち

- 第一類 希求の意を藏するもの、及びその系統
- 第二類 豫想の意を藏するもの、及びその系統
- 第三類 何等顯著なる特殊觀念の認められざるもの

固より凡ては一である。如何なる分類も決して本來のものでなく、絶對のものでない。故に、一方に於いては更に細別することも可能であると同時に、又、此三綱の間には常に互に相通する諸點の存在し、同一の用法がその何れに屬すも考へられても毫も不都合の無い様な場合の多いことは當然であり、又、幾多中間的な意義用法に屬するもの、存在することも自然の數であるとして認容せられなければならない。要するに此私案は私が自己の研究の便に供する爲の、最少限度に於ける大別綱目の紹介に過ぎないのである。

18. 用途一覽 私は、自己の研究の便宜の爲、英語の叙想法を、その古今の動向に鑑み、その意義内容に依つて分類して以上の三綱を立てた。これよりは進んでその一々に就き用途用例の細説をなすべきであるが、それは多數の小目に別たるべき性質のもので、従つて極めて多數の頁に亘らざるを得ず、全體を一眸に收むるが如きことは到底これを望み得な

い。よつて私の研究記述が如何なる形容に於いて進めらるゝかを示し、その結果が那邊に落付くかを暗示する爲、此處に便宜上此叙法の用途一覽表を掲げて置く。讀者若し以下論述するところを對照し、且、先行各章に説き來つたところを計つて品隨考覈せらるゝならば幸である。

第一類

(A) 獨立文又は主文に於いて (§§ 19-27)

(B) 從文に於いて (§§ 28-70)

(1) 名詞文句 (§§ 28-45)

(a) 願望せらるゝ事柄を表はす文句、特に“wish”の次、并にこれと等意の構文に於いて (§§ 28-34)

(β) 祈願せらるゝ事柄を表はす文句に於いて (§§ 35-37)

(γ) 命令せられ、要求せられ、主張せられ、又は提言せられ、忠告せらるゝ事柄を表はす文句に於いて (§§ 38-41)

(δ) 豫戒、用意、配慮の對象を表はす文句に於いて (§§ 42-45)

(2) 形容文句 (§§ 46-48)

(ε) 時機を表はす文句に於いて (§§ 46-48)

附説

(3) 副詞文句 (§§ 49-70)

(κ) 條件を表はす文句に於いて (§§ 49-61)

(η) 讓歩を表はす文句に於いて (§§ 62-64)

(θ) 比較を表はす文句に於いて (§§ 65-70)

第二類

- (A) 主文に於いて (§§ 71-76)
- (B) 従文に於いて (§§ 77-87)
- (1) 名詞文句 (§§ 77-78)
- (a) 懸念せらるゝ事柄を表はす文句に於いて (§§ 77-78)
- (2) 副詞文句 (§§ 79-87)
- (β) 目的を表はす文句に於いて (§§ 79-83)
- (r) 時を表はす文句に於いて (§§ 84-86)
- (δ) 結果を表はす文句に於いて (§§ 87)

第三類

- (1) 名詞文句 (§§ 88-93)
- (a) 疑の意を含む文句に於いて (§§ 88-89)
- (β) 問題提示の文句に於いて (§§ 90-93)
- (2) 副詞文句 (§ 94)
- (r) 比較を表はす文句に於いて (§ 94)
- 除説

第一類 希求の意を藏するもの、及びその系統

(A) 獨立文又は主文に於いて

19. "Present" Form. 此種に就いて先づ第一に注意すべきは祈願文 (Optative Sentence) に於ける用法で、それには凡そ次の二種目がある。

- (a) 神又は超人性のものを主語とし、そのものゝ何事かをせんことを祈願するもの、例へば

- (1) God *save* the King!
 (神の國王を守らせ給はんことを)
- (2) Lord *have* mercy upon us!⁽¹⁾
 (主の御恵吾々の上にあれ)
- (3) ... some heavenly power *guide* us
 Out of this fearful country!
 —Shakespeare, *The Tempest*, V. i. 105-6.
 (天の御力が我等を此恐しき國より救ひ出し給はんことを)
- (4) Heaven *watch* over my Eliza!
 —Sterne, *Letters from Yorick to Eliza*, IV.
 (天我がイライザを守護し給へかし)
- (5) Heaven *grant* you may not have cause to repent it.
 —Ainsworth, *Old Saint Paul's*, I. iv.
 (願はくは、君それを悔ゆる所以の無かれかし)
- (6) Britannia *rule* the wave.
 —Thomson, *Rule Britannia*.
 (ブリタニヤ海洋の主權者たれ)
- (7) Heaven *be praised* we have no Brutuses nowadays.
 —Fielding, *Tom Jones*, IV. iv.
 (難有い哉、今日はブルタスの様な人は無い)
- (8) The Lord *be thanked*.
 —Doyle, *A Study in Scarlet*, I. v.
 (あゝ有難や、有難や)
- (b) 上記以外のものを主語とし、そのものゝ何々ならんことを祈願するもの、例へば

(1) 此文は昔英國にベストの流行した時、患者の出た家の戸口に貼り付けた紙片に用いたもの。Defoeの *Journal of the Plague Year* や Ainsworthの *Old Saint Paul's* 等参照。

- (9) Long *live* Cosroe, mighty emperor!
—Marlowe, *Tamburlaine the Great*, I. i
(大帝コスロウ、萬歳なれ)
- (10) Thy kingdom *come*, thy will *be done*.
—*Matthew*, iv. 10.
(御國の來れかし、御心の成らんことを)
- (11) Success *attend* you!—Sheridan, *The Rivals*, IV. i.
(成功汝にあれ)
- (12) Peace *be* with all the world! My blessing on my
friends! My forgiveness to my enemies!⁽¹⁾
—Hawthorne, *The Custom House*.
(全世界に平和あれ、我が祝福友の上に、我が恕
し敵の上にあれ)

- (13) Mine *be* a cot beside a hill!—Rogers, *A Wish*.
(我が住む小舎を丘のほとりにむすびたや)

の如く、類例を文學の中に求むれば殆んさいくらでも出る。勿論、これ等は今日の英語に於いては昔程盛んではないが、然も莊重なる詩文には現代尙その例に乏しさしない。且又、比較的少數の固定的言方に於いては常に吾々の耳にするところで、*God bless you!*; *Heaven forbid!* 等、殆んさ用例の指摘を必要さしない程であるが、尙、序を以て數箇の實例を引くこ、

- (14) God *help* 'em.—Eliot, *Silas Marner*, X.
(神様が彼等をお助け下さりますやうに)

(1) 此第二文以下は "My blessing *be* on my friends! My forgiveness *be* to my enemies!" の略たることは言ふまでもない。

- (15) Heaven *bless* you!—Doyle, *The Blue Carbuncle*.
 (天の御加護があなたの上にありますやうに)
- (16) God *keep* you out of the clutches of such a man
 as he.—Doyle, *The Boscombe Valley Mystery*.
 (神様の御加護に依りまして、あなたがあんな男
 の毒手にかゝられることのありませんやうに)
- (17) God *forbid* that you should ever have such an
 experience as mine!—Hardy, *Jude the Obscure*, IV. iv.
 (あなたがかりにも私の様な経験をせられません
 やうに)
- (18) God *forgive* me.—Shaw, *Saint Joan*, II.
 (おゝ神様の御赦しを)

等、引例の出所は多少古くはあるが、尙現存の語法
 である。又、今日吾々がその原意を意識せずに用ひ
 て居る“Good-bye”は、その昔“God be with you!”と
 言つた⁽¹⁾のが崩れて轉訛したものであるから、源を
 たゞせば此用法の一例であると言はれ得る。又、斯
 の如き用法に立つ God, Heaven の類は屢省略せられ
 て“Bless you”. の如く言ふことがある。例へば

- (19) *Give* you good night.⁽²⁾
 —Shakespeare, *Hamlet*, I. i. 16.

(1) Cf. God be with you!—Marlowe, *Dr. Faustus*; ... but to St. James's to Mr. Wren, to bid him “God be with you!”—Pepy's *Diary*, 6th. Aug., 1668; Good B' w' y'!—Thomas D'Urfey, *Pills to Purge Melancholy*, III.

(2) Cp. God give you good-morrow, Master Parson.—Shakespeare, *Love's Labour's Lost*, IV. ii. 84.

(御機嫌よくおやすみ)

- (20) *Bless your sweet face, my pet.*⁽¹⁾

—Eliot, *Adam Bede*, XXX.

(おゝ可愛い顔なこと、可愛いもの)

の如くであるが、これは元來、「神」さいふごを明らかに口にすることを憚るところから生じた語法で、その爲、時々次の如き不徹底な用例に遭遇する。

- (21) *'Od damn it all!*—Hardy, *Jude the Obscure*, I. x.

(えゝ、いまましい)

此最後の例は呪罵の語であること勿論であるが、事實、此用法は斯の如く屢呪罵、諦觀、嗟嘆等の意を表はすところがある。若干の實例を指摘すれば、

- (22) *Woe betide the chase, woe worth*⁽²⁾ *the day!*

—Scott, *The Lady of the Lake*, I. ix.

(禍なれや此狩ぐら、悲しい哉や今日の此日)

- (23) *Captains of the Tribes, you follow, and woe be to that man who hangs back in the hour of battle.*

—Haggard, *Ayesha*, XXII.

(部落の首長共、ついて來れ、いざ鎌倉といふ場合にたじろぐ者には禍があらうぞ)

- (24) *But oh, deuce take their cursed envenomed tongues.*

—Anne Brontë, *The Tenant of Wildfell Hall*, XI.

(1) Cp. *God bless your sweet, calm face.*—Doyle, *The Sign of Four*, V.

(2) 此處に出る *worth* は“become”を意味する O.E. *weorðan* (cf. Ger. *werden*) から來たもので、此處では“come”を意味し、次に來る *the day* は Dative Case であつて“to the day”の意である。

(然し、まあ、彼等のいまいまい毒舌には悪魔
が取りつけ)

- (25) *Perish* the race and *wither* a thousand women if
only the sacrifice of them enable him to act Hamlet
better, to paint a finer picture, to write a deeper
poem, a greater play, a profounder philosophy!

—Shaw, *Man and Superman*, I.

(若し人類を亡ぼし、女を萎れさして、一層良い
ハムレットが出で、一層深い詩が産れ、一層偉大
な劇が出来、一層深遠な哲学の出るものならそれ
も良からう)

- (26) Your sins *be* upon your heads.

—Binyon, *Boadicea*, IV.

(罪業の酬、汝の上にあれ)

等がそれである。又、此場合にも主語の省略が前の
場合と同様の理由から起るので、例へば

- (27) *D*—⁽¹⁾ it, I love you.

—Thackeray, *Pendennis*, XXVII.

(あゝあ、わしはお前が可愛いゝ)

- (28) You did not say there was a dog. *Damn* you.

—Charlotte Brontë, *Shirley*, XIX.

(あなたは犬が飼つてあるとは言ひませんだね。
腹が立つわ)

- (29) *Confound* that boy!

—Dean Farrar, *The Three Homes*, III.

(癪にさはる小僧だ)

(1) D——=damn.

(30) *Damn the man! he was thinking.*

—Aldous Huxley, *The Monocle.*

(虫のいゝ奴だ、勝手な考なんかして)

等、その例は極めて多い。而して、今日用ひらるゝ呪罵の言方で最も普通なのは、次の如きである。

(31) *Dauphin be damned!*—Shaw, *Saint Joan*, II.

(ドーフィンがいゝや、馬鹿馬鹿しい)

(32) *Kinsman be hanged!*—Hardy, *Tess*, VIII.

(身内が聞いてあきれわ)

而して又、これ等と同じ部類に入るべきものに“Be damned to you!”の如き形を見ることがあるが、それは“*You be damned*”と“*Woe be to you*”との混雜に依つて出来た一種の畸形である様に考へられる。

今、一例を擧げるこ、

(33) *Unless to argue with them. Then sack the lot?*

But be damned to that. They were good fellows.

They were reasonable. They knew their work.

—Tomlinson, *Gallions Reach*, II.

(彼等と議論するのでなくちや、では全體を首にするか。いやそれは野暮、亂暴といふものだ。彼等は善良な人間で、わけも分り、自分の仕事も心得て居るんだ)

の如くである。又、此種の祈願文は、時に誓言の意を表示するものとなり、確言の助けとなる。例へば

(34) Surely you must be misrepresenting the facts.

—Heaven *forbid!*—Eliot, *Amos Barton*, VII.

(あなたはきつと事實を狂げて御出でになるにちがひ無いと思ひますが——いやどうして、中々の事)

(35) D—*I take me, if I did not feel some remorse.*

—Lamb, *The Superannuated Man*.

(私は實際幾分遺憾に思ひました)

(36) ‘It is,’ said Jude solemnly. ‘Absolutely. So help me God!’—Hardy, *Jude the Obscure*, III. vi.

(「さうです。全くです。神様も御照覽下さりませ」とデユードはおごそかに言つた)

の如くである。(1) 又、

(37) “Give ear, my king.” The king said, “Jove *forbid!*”—Masefield, *Minnie Maylow’s Story*.

(「王様御聴き下さりませ」。王は對へて「いや、ならん」と仰せられた)

の如きは忌避又は拒絶の意を強調するものであり、

(38) *Bless me, Poole, what brings you here?*

—Stevenson, *Dr. Jekyll and Mr. Hyde*, VIII.

(1) Cp. also: *I’ll be hanged* if you and your silent Friend there are not against the Doctor.—Addison, *The Spectator*, LVII; *I wish I may never stir* if I didn’t—Eliot, *Adam Bede*, XXXII. Cp. again: *But hang me* if I hadn’t the best of the argument.—Marryat, *Midshipman Easy*, XIII; *If ever I utter an oath again may my soul be blasted to eternal damnation*.—Shaw, *Saint Joan*, II. 尙、次の如き例になると、それが所謂 Subjunctive Present の例であるか、或は Imperative Mood の例であるか断定を下し難くなる。而して、斯の如き存在こそ言語の生命に注目するもの、特に注意すべきものなのである。D—*n me* if I don’t love him better than my own sou’.—Fielding, *Tom Jones*, V. x. (D—n=damn). § 100 の例 (9) に再言する。

(まあ、プール、何の用で来ました)

(39) To live, God spare us, you are rich and proud.

—Masefield, *Richard Whittington*.

(生きんが爲ですつて、まあ意外な事、あなたは御金持で御家柄の方ぢやありませんか)

等は驚愕の意を表示し、又、

(40) Oh, bless you, it doesn't matter in the least.

—Doyle, *A Study in Scarlet*, I. vi.

(いや、君、そんな事は少しも問題でないだよ)

の如く反對論の鋭鋒を和ぐる等、此種の構文は前後の關係によりて様々の効果を生ずるものである。

20. 『“Present” Form + 主語』の構文。叙想法は、一面、命令法を極めて緊密なる思想的關係に立つものである。(1) それであるから、今日屢々一人稱及び三人稱の命令文を稱せらるゝものは、古くは此構文を採つたものであるが、そこに何の不思議もなく理解せられ得べく、今日でも莊重な詩文には保有せられて居る。その中、一人稱のは we を主語とし、

(1) And look we friendly on them when they come.

—Marlowe, *Tamburlaine the Great*, I. ii.

(彼等來らば親愛の眼を注いでくれよう)

(2) Well, sit we down,

And let us hear Bernardo speak of this.

—Shakespeare, *Hamlet*, I. i. 33-4.

(1) 第二章所説參照。尙、前頁脚注に表はるゝ Fielding の文例、及び第六章參看。

(さ、一同腰を下ろし、パナードウがこれの話を
するのを聴きませう)

- (3) *Sing we merrily unto God our strength.*

—*Psalm lxxxix. 1 (Prayer-Book Version).*

(いでや我等の力なる神に樂しげに歌はん)

- (4) *O dearest Albrecht! Climb we not too high,
Lest we should fall too low.*

—Coleridge, *The Death of Wallenstein*, I. iv.

(いともめでたきアルブレヒト。餘りに高く陞る
ことはひかへたいこと、餘りに低う墮つることを
おそるゝが故に)

- (5) *Thither our path lies; wind we up the heights.*

—Browning, *A Grammarian's Funeral.*

(我等の道はかなたの方へ。さ、高みへとつゞら
の道を辿り行かう)

- (6) *Turn we now to the historian and biographer.*

—Birrell, *Obiter Dicta, Carlyle.*

(我等は次に歴史家傳記家の方へ注意を向けよう)

の如く、又、三人稱の例では

- (7) *Why now, blow wind, swell billow, and swim
bark!*

The storm is up, and all is on the hazard.

—Shakespeare, *Julius Caesar*, V. i. 67-8.

(さあ、かうなれば、風吹かば吹け、浪も高まれ、
船も漂よへ。暴風は已に來た、萬事は天の運にあ
る)

- (8) *Come, fill each man his glass.*

—Dryden, *Love for Love*, I. i.

(さあ、各杯を満すと致さう)

- (9) *Laugh* those that can, *weep* those that may.

—Scott, *Marmion*, V. xvii.

(笑ひ得るものは笑へ、泣き得るものは泣け)

- (10) If I succeed, and she will have me . . . well.

If not, *come* headsman with the burial knell.

—Masefield, *Minnie Maylow's Story*.

(若し、私が首尾よくて、王女が私を夫として下さるならば…上々吉。さなくば所刑の役人が吊鐘の響と共に来るも承知の前)

の如きが普通の例で、その變態としては、

- (11) If ever you disturb our streets again,
Your lives shall pay the forfeit of the peace.
For this time all the rest *part* away.

—Shakespeare, *Romeo and Juliet*, I. i. 103-5

(若しかりにも御身等が二度と再び我等の街を騒がせば、御身等の命を以て和平の購ひたらしめる。今日限りは、外の者共凡て退散いたせ)

の如く主語先出の例が挙げられ得る。又、此類で今日尙常用圏内にあるものでは、

- (12) And Silvia—*witness* Heaven, that made her fair!—
Shows Julia but a swarthy Ethiope.

—Shakespeare, *Two Gentlemen*, II. vi. 25-6.

(そしてあのシルヴィヤに比べると——おムシルヴィヤを美女とした神も御證明あれ——ヂュリヤは丸で色の黒いエシオピヤ人の様にしか見えない)

- (13) Miss Crawley, *be it known*, did not leave her room until near noon.—Thackeray, *Vanity Fair*, XVI.⁽¹⁾

(クローレイ嬢は、晝近くまで自分の部屋を出なかつたことを了解されたい)

- (14) *Be it enough to say*, that he was a native of New Hampshire.—Hawthorne, *David Swan*.

(彼がニューハムプシヤの産であつたことを言へば澤山といふことにしたい)

- (15) *Suffice it to say*, that I found him very troublesome.

—Anne Brontë, *The Tenant of Wildfell Hall*, XVI.

(私は彼をうるさい人だと思つたとだけ言つて置かう)

- (16) *Suffice it that you have been shown in your true colours*.—Doyle, *Uncle Bernac*, XVII.

(お前が本當の姿に見せつけられただけで満足するが良い)

- (17) The prisoner turned with the reckless air of a man who abandons himself to his destiny. “*Be it so*,” said he. “And pray what am I charged with?”

—Doyle, *The Man with the Twisted Lip*.

(囚人は萬事諦めた人のどうでもなれといつた様な様子で振り向いて、「そんならそれでいい。が私に何の罪がある」と言つた)

(1) “To my shame *be it spoken*” 等いふ言方は今日でも時々ある殆んど熟語と言つても良い言方であるが、参考の爲少し古い例を追加して置かう。*Be it known to you, that I keep a couple of pads myself, upon which, in their turns, (nor do I care who knows it) I frequently ride out and take the air; though sometimes, to my shame be it spoken, I take somewhat longer journies than what a wise man would think altogether right.*—Sterne, *Tristram Shandy*, I. viii. 尙 § 99 参照。

等がある。又、次の例では本節及び前節に説くところが一時に現はれる點に於いて注目に値する。

- (18) He told me that when he was about five or six, just before the passing of the Reform Bill of the 'thirty-two, there was a song which all right-thinking people used to sing, with a chorus that went like this: 'Rot the people, blast the people, damn the Lower Classes.'—Aldous Huxley, *Antic Hay*, V.

(彼は五六歳の時分、それは丁度千八百三十二年の選舉區改正法案が議會を通過した直前に、凡ての正當な考の人が歌つた歌に民衆よくたばれ、神民衆をたゞきつけよ、下層社會に罰當れといふ折返しのある歌があつたと私に教へてくれた)

21. 獨立遊離の讓歩文句。前節に説いた各種の祈願文は、何等の接續詞も無しに他の文句と並置せられ、讓歩の意を發揮するところがある。即ち、斯の如く並置せられたる文句は、その意味效果に於いては從屬文句と同等であるけれども、その形式に於いては尙、獨立遊離の状態にあるので、私はこれを標題指示の如くに名附ける。而して、此場合にも、叙想法は頗る命令法と接近したるものである特徴を現はし、時にその何れの叙法に屬するか判別し難い場合がある。今、若干の實例を擧げると、

- (1) *Be it sin or no, I hate the man.*

—Hawthorne, *The Scarlet Letter*, X.

(罪なことかは知らないが、私はあの人を悪みます)

- (2) The power of will, *be* it great or small, which God has given us, is a Divine gift.

—Smiles, *Character*, VII.

(意志の力といふものは、それが大であらうが小であらうが、天から授かつたものであるから、神の恵みである)

- (3) But if any man will be true brother to me, true brother to him I'll be, *come* wreck or prize, storm or calm.—Kingsley, *Westward Ho!*, I.

(然し誰なりとも私に對して本當の兄弟の様にしてくれるならば、私も其人には本當の兄弟の様にならう。たとへ破滅が來らうと、勝利が來らうと、荒天に溺されようと、靜逸を楽しまうとも)

- (4) I have made an end of doubts and fears, and *come* death, *come* life, I'll meet it bravely.

—Haggard, *Ayesha*, XXIII.

(私にはもう疑も恐も無い。だから生來らんも、死到らんも敢然それに處する)

- (5) *Be* it ever so humble, there's no place like home.

—Payne, *Home, Sweet Home*.

(如何に賤しい伏屋でも、我が家にまさる處は無い)

の如くである。又、主語たるものが一般不定のものである場合には、それは省略せられて、例へば

- (6) *Look* left, *look* right, the hills are bright.

—Housman, *A Shropshire Lad*, I.

(右を見るも、左を見るも、山々は光にはえて居る)

の如くなる。その他、極めて普通な用例としては、

(7) *Be* England what she will,

With all her faults she is my country still.

—Charles Churchill, *The Farewell*.

(此イギリスは、たとへ如何なるものであらうとも、數々の缺點を以てしても、尙我が國である)

(8) They aren't the best sheets, but they are good enough for anybody to sleep in, *be* he who he may.

—Eliot, *The Mill on the Floss*, I. ii.

(あれは何も極上のシートではありません。然し、どこの誰様だつて寢るのに不足はありません)

(9) *Be* that as it may, Kidd never returned to recover his wealth.—Poe, *The Gold Bug*.

(それは兎も角、キッドはもう二度と財を取戻しに歸つて來なかつた)

(10) *Be* the issue of this project what it may, I will not shrink from it.

—Ainsworth, *The Tower of London*, I. i.

(此企ての結果がどうならうと、私はびりつともしない)

(11) *Come* what will, and however I may be foiled, I will not desist till I make you mine.

—Ainsworth, *Old Saint Paul's*, I. iv.

(此先どの様な事にならうと、又如何に私が鼻をあかされることがあらうとも、お前を私のものとしないうちは手を引きはせん)

(12) But I will not stir from this place, *do* what they can.—Shakespeare, *A Mids. Night's Dream*, III. i. 125.

(然し、彼等が何事をしようとも私は此場を去らない)

- (13) She is safe, *do* what you will.

—Binyon, *Boadicea*, VIII.

(汝が何事をしようとも、女王は御安泰であるぞ)

- (14) Well, perhaps it isn't too late to mend a bit there, though it is too late to mend some things, *say* what they will.—Eliot, *Silas Marner*, XX.

(さあ、其點を少し改めるのは未だ時機遅しといふこともないでせう。尤も物事によつては、何と言はうと彼と言はうと、改めるに時機已に遅い事もありますね)

等がある。尙、これは吾々の當面の問題たる叙想法に直接關係するこゝではないが、此種の文句はその伴ふ意味上の主文が“Past”の部類に屬する動詞を述語とする時、次の如き形態を採る。

- (15) *Be* that as it might, there was never in his heart so much cruelty as would have brushed the down off a butterfly's wing.

—Hawthorne, *The Custom House*.

(それは兎も角、彼の心の中には蝶の翅の鱗粉をこすつて取る位の殘忍性すら無かつた)

- (16) *Be* the original commodity what it might, it was gold within his grasp.

—Hawthorne, *The Great Stone Face*.

(原料が何であつても、彼的手中に歸すれば必ず黄金となつた)

- (17) Just when I had determined that, *come* what would, I would go into Wales, Wynne one day told

me that Winnie was coming to live with him at Raxton.—Watts-Dunton, *Aylwin*, II. iii.

(丁度私がどんな事にならうとまゝよ、ウエイルスへ行かうと心を決めた時、或日ウインはウイニーがラクストンの彼の家へ來るといふことを告げてくれた)

- (18) *Come* what might, I had whipped my cousin, like the cur he was.—Besant, *The Orange Girl*, I. i.

(結果がどうならうと、兎に角私は已にあの犬の如き従兄を犬の様に打つたのであつた)

- (19) Hunter, *do* what we could, never recovered consciousness in this world.

—Stevenson, *Treasure Island*, XXII.

(ハンターは吾々が出来るだけの事をして、二度と此世で意識を恢復しなかつた)

- (20) *Look* where I would, I could see no foothold.

—Doyle, *The Sign of Four*, VI.

(何處を見ても足がよりは目に入らなかつた)

- (21) In the meantime, *talk* as we pleased, there were only seven out of the twenty-six on whom we knew we could rely.—Stevenson, *Treasure Island*, XII.

(かゝる間に、いくら何と言はうが、頼みになる者は二十六人中只の七人であつた)

- (22) *Try* as she might, Elizabeth could never meet with him.—Hardy, *The Mayor of Casterbridge*, XXXI.

(いくら骨折つて見ても、エリザベスは一度も彼に會ふことは出来なかつた)

22. 方言に於ける *Come*. 尙、方言に於いて時の副詞文句 “when ... comes” 同等の役目をなすと言はるる獨立遊離の並置文句に用ひらるゝ *come* も此類に

屬するもので、“let...come”をその原義とする。多少の例を引くこゝ、

- (1) I mayn't be equil to stand i' the desk at all,
come another winter.

—Eliot, *Silas Marner*, X. (North Warwickshire)

(もう一度冬が來るとさいご、俺は机につくことも出来まいといふものだけ)

- (2) ... there's ne'er one broke sin' my old man an'
me bought 'em at the fair twenty 'ear *come* next
Whissuntide.

—Eliot, *Adam Bede*, XX. (North Staffordshire)

(うちの人と私が次の聖灰節が來れば二十年になるといふ古い昔に市であれを買つてから一つもこわれたことがないのに)

- (3) I screwed up a little money, thinking *come* Whit-
suntide I'd take a holiday and go and see her an' th'
little one.

—Mrs. Gaskell, *Mary Barton*, IX. (Lancashire)

(わしは聖灰節の頃になつたら、一つ休暇を取つて娘と赤ン坊とを見に行かうと思つて少し金をためたよ)

- (4) He'll dust your jacket vor ee purty tidy *come*
marnen.⁽¹⁾

—Raymond, *Love and Quiet Life*. (Somersetshire)

(朝になりや、あの人がお前のジャケットを綺麗に拂つてくれますさ)

(1) vor ee purty tidy = for you pretty tidy. Cf. also: Ten years ago *come* Lammes, Herluin bade light the peat-stack under me.—Kingsley, *Hereward the Wake*, I.

の如くである。

23. 相當句. 前來說き來つたところは、夫々の箇所
所に注意した通り、何れかと言へば比較的少數の、
幾分固定的な言方以外には既に古風な用法で、近世
英語に於いては分解せられて助動詞の援用を待つこ
とが多い。こゝに相當句と名附けるのは斯の如くに
用ひらるゝ「助動詞+不定詞」の構造を有する句動詞の
謂で、それは古來の叙想法の役目を、その分析せら
れたる緻密なる意味に於いて繼承するものである。
而して、此場合に於ける相當句は次の如く二種類に
分たれる。即ち、

(a) §19 に屬するものは多く *may* を用ふる。例へ
ば⁽¹⁾

(1) *Long may Theridamas remain with us!*

—Marlowe, *Tamburlaine the Great*, I. ii.

(セリデイマス永く吾等と共にあれ)

(2) *May he rest in peace!*—Irving, *Rip Van Winkle*.

(彼の靈安かれ)

(3) *May no evil dream disturb my rest!*

—*Evening Hymn*.

(悪い夢が私の眠りを亂すことのないやうに)

(1) 本節始め相當句の條には舉例の少いことが普通である。それは言ふまでもなく實際の用例が乏しいことを示すのではなく、本章が純叙想法の觀察を主眼とするからである。尤も等しく相當句の場合でも何等かの理由で特に注意を要すると認むる場合には多數の例文を引く。

- (4) *May you be more merciful to your daughters than my parents were to me.*

—Kingsley, *Westward Ho!*, VII.

(汝、娘に對しては、我が兩親の我に對せしよりも慈愛深くあれかし)

- (5) *And luckier may you find the night Than ever you found the day.*

—Housman, *A Shropshire Lad*, LIX.⁽¹⁾

(汝の夜の休み、ありしいつの日よりも更に幸多きものなれかし)

の如くである。而して、此場合の *may* は普通の叙實法に屬して可能又は許可を表はす場合のものさば、その文に於ける配置を異にすることは讀者の直に認めらるゝところであらう。尙、此構文も屢

- (6) *May this hand forget each art . . .*

Ere I forget the land that gave me birth!

—Goldsmith, *The Captivity*, I. 89-91.

(此手、業無きものとならんとも、我斷じて生みの故國を忘るゝことはあらじ)

- (7) *May we and ours die the death of dogs, and our bones be thrown to the jackals and the kites, if we break the oaths!—Haggard, Allan Quatermaine, VI.*

(我等若し己が誓を破らんには、我、眷族もろ共に犬の如き死を遂げて骨を豺狼の餌食とせられんも苦しからじ)

(1) 参考の爲一節全體を引く。 *Lie you easy, dream you light, / And sleep you fast for aye; / And luckier may you find the night / Than ever you found the day.*

の如く、誓言又は確言の助けとなり、又、時には

- (8) *May we but stand before impartial men,
To his poor one I durst adventure ten.*

—Bunyan, *The Pilgrim's Progress, The Apology.*

(我等若し公平無私の人々の前に立つを得ば、彼の指摘する貧弱なる一難に對して、我敢て十難を擧げん)

の如く、獨立遊離の條件文句を成すことがある。(1)

- (b) §20 に屬するものは一般普通に *let* を用ふる。

例へば

- (1) *Come, let us march.*

—Marlowe, *Tamburlaine the Great*, I. ii.

(さあ、進軍としよう)

- (2) *Let us begin and carry up the corpse.*

—Browning, *A Grammarian's Funeral.*

(さあ、ぼつぼつ亡き骸を運び登らう)

- (3) *Let us preserve a dignified silence.*

—Wilde, *The Importance of Being Earnest*, III.

(一つ威儀ある沈黙を守らう)

- (4) *So let it be!*—Borrow, *The Romany Rye*, III.

(それで結構)

- (5) *It must be—let it be so.*

—Weyman, *The Abbess of Vlaye*, XXIII.

(さうでなくてはならない。さうして置かう)

- (6) *Those that will hear me speak, let them stay here.*

—Shakespeare, *Julius Caesar*, III. ii. 5.

(1) §25 参照。

(私の演説を聞かうと思ふ方々は此處にお留まりなさい)

- (7) *Let it suffice* to inform him that in our passage from thence to the East Indies we were driven by a violent storm to the north-west of Van Diemen's Land.

—Swift, *Gulliver's Travels, Lilliput, I.*

(其處から東印度諸島へ渡る時、吾々は烈しい嵐の爲にヴァン・デ・イ・メンス・ランド[タスマニヤ]の西北の方へ吹き流されたと言へば、それで澤山といふことにして置かう)

- (8) Always the soul hears an admonition in such lines, *let the subject be what it may.*

—Emerson, *Essays, Self-Reliance.*

(吾々の魂は常に斯の如き文句から戒告の聲を聞く。その主題とするところが何であらうとも)

の如くである。而して、此場合には、前に主格であつたものが目的格として現はれることは言ふまでもない。

24. “Past” Form 及び “Past Perfect” Form. 上記の如き場合に “Past” Form 又は “Past Perfect” Form を用ふることは、近世英語に於いては “Present” Form 程も優勢ではないが、それを用ひた場合には現實にあらざる事柄に對する詮なき願望、又は實現の望み無き希求を表はす。例へば

- (1) *O were I on Parnassus' hill.*—Burns.

(あゝ我バーナツサスの丘にありせば)

- (2)
- Oh were it mine!*
- Wordsworth,
- To the Queen*
- .

(おゝ其力の欲しいことよ)

- (3)
- Ah! were she a little less giddy than she is; and had she but the sterling qualities of Cherry, my young friend!*
- Dickens,
- Martin Chuzzlewit*
- , XVIII.

(あゝ、彼女の頭がも少し落ち着いて居て、チェリーだけの確かな性質を持つて居てさへくれたらなあ)

- (4)
- Could I but have once more the strength which then supported me!*

—Gissing, *Henry Rycroft*, *Spring*, IX.

(今一度あの時位の力がありさへしたらなあ)

- (5)
- Had she but died!*

—Goldsmith, *The Vicar of Wakefield*, XVII.

(死んでさへくれて居たらなあ)

- (6)
- O, had he lived!*
- Tennyson,
- The Brook*
- .

(あゝ死なで居てくれたらなあ)

等その例である。かゝる場合には通常“Past” Formは現在時に關する願望であり、“Past Perfect” Formは過去時に關する希求を表はすものであると言はれ、又、さう言つて差支への無いのが通常であるが、然し實は、嚴密に其様に區別し難い場合のあることを忘れてはならない。蓋し、此場合時の觀念は言者の腦裡に於いて第一義的重要性を負ひて居ることは限らないので、例へば上例(4)の“Could I have once more...”は場合によつては未來時に關するものでもあり得べ

く、又(6)の“had he lived”は、これを事務的に観すれば“were he living”と大差の無い場合が多い。要は言者の脳裡に發動する思想の中に含まれて居る「證無さ」の感の強弱が“Tense”の差異を産み出すので、時の觀念は第二義的意義しか持たないのである。

[注意] 尙、本節に入るべきものに“Would God...”の構文があるが、聊か趣を異にする事情を伴ふので、便宜上 §27 に譲る。

25. 獨立遊離の條件文句 前節に説いた種類の祈願文は、屢、他の文句と並置せられ、その間自からの勢に依つて條件の意を附隨することがある。かかる場合、私はその文句を獨立遊離の條件文句と命名する (§21 参照)。(1) 今、若干の例文を示せば、

- (1) He were no lion, *were* not Romans hinds.
—Shakespeare, *Julius Caesar*, I. iii. 106.
(羅馬人が牝鹿の様でなかつたら彼とて獅子とはなるまいといふもの)
- (2) *Were* we not very strong, it could never have been done.—Haggard, *Ayesha*, V.
(吾々が強壯な身體でなかつたら、あんな事は到底出来なかつたであらう)
- (3) *Were* he but *gifted* with imagination he might rise to great heights in his profession.
—Doyle, *The Silver Blaze*.

(1) 尙、附隨意味の醸成に就いては §23, (a), 例(8) 参照。

(あれで想像力さへ恵まれて居たら、あの職業で餘程昇進が出来るであらうが)

- (4) The prospects of your verse might be enhanc'd
Were yourself cleaner.

—Masefield, *Tristan's Singing*.

(お前の身なりがもつと清淨であつたら、お前の詩の見込も高まつたかも知れないがね)

- (5) Had I as many souls as there be stars,
I'd give them all for Mephistophilis.

—Marlowe, *Dr. Faustus*.

(おれに星の數程澤山の魂があるとしたら、メフィストフィリスを手なづける爲なら皆でもくれてやるわ)

- (6) O, might I see hell, and return again,
How happy were I then.—*ibid.*

(おゝ、地獄を見て、又歸つて來ることが出来たら、どれ程幸であらう)

- (7) You would have thought it was Diana herself, had
you seen her in her hunting dress.

—Bulfinch, *The Age of Fable*, IV.

(若し彼女が狩衣を着て居るのを見たら、あなたはこれぞダイアナ其人だと思つたでせう)

- (8) Had any one told me of it, I would have rejected
it. Had it been brought to me, I would have refused
it. As I found it, I want to keep it.

—Wilde, *De Profundis*.

(誰か人が其事を言つてくれたのであれば、私はそれを拒絶したでせう。誰かゞ持つて來てくれたのであれば、私はそれははねつけたでせう。が自分で見付けたのですから、私はそれを持つて居りたく思ひます)

- (9) *Had Londinium ever been taken by storm it is quite inconceivable that such a tremendous event should not have been mentioned in the Anglo-Saxon Chronicle.—Home, The History of London, III.*

(若しロンドンが襲撃によつて奪取せられたことがあつたとすると、そんな大事件がアングロサクソンの年代記に記録されなかつたといふことはどうしても考へられない)

- (10) Nella replied, as firmly as she could, though her hand shook violently with excitement, *could* Miss Spencer but *have observed* it.

—Bennett, *The Grand Babylon Hotel*, IX.

(ネラは出来るだけしつかとして答へました。尤も實のところ、スペンサーさんは氣付かなかつたでせうが、彼女は興奮のあまり手を震はして居たのです)

の如き類である。尙、祈願文と條件文句との意義上の關係に就いては §49 参照。⁽¹⁾

26. 獨立遊離の讓歩文句。又、同じ祈願文は時々他の文句と並置せられて、自體の獨立を保有しつつ、その意義に於いてはそれに伴ふ文句に對する讓歩文句たる効果を生ずることがある (§21 参照)。例へば

- (1) Which, *were* it toilsome, yet with thee were sweet.

—Milton, *Paradise Lost*, IV. 439.

(1) Cp. also: If the children could only remain children!—Hall Caine, *The Prodigal Son*, I. iii; Ah, if I had only known!—Harraden, *Ships that Pass in the Night*, I. vi. 委しくは §61 参照。

(それは、骨の折れる事ではあつても、御身には
楽しみであらう)

- (2) *Were it written* in a thousand volumes, the U-
heroic of such volumes hastens incessantly to be
forgotten.—Carlyle, *Past and Present*, IV. i.

(假令千卷の書に記されたりとも、その非英雄的
なものは續々として忘れられて行くもので、る)

- (3) I will cut his throat, *were* he my own mother's son.
—Lytton, *Rienzi*, I. x.

(たとへ彼が血を分けた兄弟であらうとも殺して
くれるわ)

- (4) She is coming, my own, my sweet ;
Were it ever so airy a tread,
My heart would hear her and beat,
Were it earth in an earthy bed ;
My dust would hear her and beat,
Had I lain for a century dead ;
Would start and tremble under her feet.

—Tennyson, *Maud*, I. xxii. 11.

(我がめづる、我が彼は来る。
その踏む足の如何に軽くも
我が心はそれを聞いておどらん、
たとへ土なる床の土にありとも。
我が亡き骸は聞いておどらん、
たとへ我、死して百年眠るとも。
その踏む足に、おどりふるはん)

- (5) I will alter this : this shall be altered, *were* there
ten Mrs. Yorkes to do battle with.

—Charlotte Brontë, *Shirley*, XVI.

(私はこれを變へよう。變へなければならぬ。た
たとへ十人のヨーク夫人と闘はねばならぬとも)

- (6) The third: even *were* he free, in a family like his own where marriage usually meant a tragic sadness, marriage with a blood-relation would duplicate the adverse conditions, and tragic sadness might be intensified to a tragic horror.

—Hardy, *Jude the Obscure*, II. ii.

(第三には、かりに彼が自由の身であつても、結婚といふことが通常悲哀を齎らす彼の如き家筋に於いては、血族結婚は其不利の條件を倍加し、悲哀は極まつて慘劇となるかも知れないことであつた)

27. *Would*(=wish). *Would* が “wish” の意味に用ひられ、一種の祈願文を構成することは周知の事實であるが、此 *would* は元來 *will* の所謂 Subjunctive Past で、それは §24 に説いたところと同列に論ぜらるべき性質を有し、古くは “*Would God...*” の形に於いて用ひられ、『...を神意にこそ』『...が神意なりせば』程の意味を有したるものである。(1) 即ち、例へば

- (1) *Would God*, that thou couldst hide me from myself!—Tennyson, *Guinevere*, 117.

(おゝ御身がこの妾を我が身にも隠してくりやることが叶へばよ)

- (2) *Would God* that I did lie!

—Kingsley, *Hereward the Wake*, XVII.

(私の言つたことが嘘であつたらなあ)

(1) Ah my sweete home Hierusalem(=Jerusalem)/ *Would God* I were in thee.—*Hierusalem my happie home*, XI.

等が古來の語法を傳へたものであるが、此構文は可なり古い頃から“(I) wish to God . . .”の構文⁽¹⁾と混同せられ、その類推によつて次の如き語法を生じ、近世に至つては多く此方が用ひられる。例へば

- (3) *Would to God we had died by the hand of the Lord in the land of Egypt.—Exodus, xvi. 3.*

(吾々エヂプトの地にて神の御手に死したらば良かりしものを)

- (4) *Would to God I had done it!*

—Thackeray, *Henry Esmond*, II. iv.

(あゝすれば良かったのに)

- (5) *Would to God that I had given him notice on the very day that he came.*

—Doyle, *A Study in Scarlet*, I. vi.

(彼が來た其日に早速斷りの通告をして居ましたらばなあ)

- (6) *Would to God I were the child's grandpapa!*

—Mansfield, *The Little Governess*.

(この私があの子の祖父であつたらなあ)

- (7) *I would to God that I had been able to tell the truth.—Wilde, An Ideal Husband, II.*

(本當の事が言へたのだつたらね)

の如くである。かくて又、此語法は“should wish”; “should prefer”を原義とする (§71 参照) 次の如き構文と雜糅するに至つた。

(1) §§ 28-9 参照。

- (8) *I would* it were my fault to sleep so soundly.
—Shakespeare, *Julius Cæsar*, II. i. 4.
(あの様にぐつすり眠て見たいものだなあ)
- (9) *I would* I had but one of the clerks' places.
—Jonson, *The Staple of News*, I. i.
(私も全く此處の事務員の地位が欲しいわ)
- (10) *I would* that it had been my soul and not my boy's.—Haggard, *Allan Quatermaine*, *Introduction*.
(それが我が子の魂でなくて私の魂であつたら良かったのに)
- (11) O, *would* I had never seen Wertenburg, never read books!—Marlowe, *Dr. Faustus*.
(おゝ、初めからてんでウアーテンバーグも知らず、本も讀まなかつたらと思ふわ)
- (12) *Would* that I could die for thee!
—Bulfinch, *The Age of Fable*, VIII.
(お前の爲に死ねたらなあ)
- (13) *Would* that I could go!—Barrie, *Quality Street*, IV.
(私も行けたらいいんだがなあ)

又、次の如きも同列に考へて良い。

- (14) *I would* rather we lived poor all our days than that he should wear his life out.
—Miss Mulock, *John Halifax*, XXII.
(彼が命をすりへらす位なら、むしろ二人が一生貧しく暮した方がまだ)

[注意] 尙、叙想法の主文に用ひらるゝものには他のものがある。§71-4 参照。

(B) 従文に於いて

(1) 名詞文句

- (a) 願望せらるゝ事柄を表はす文句、特に“wish”の次、並にこれら等意の構文に於いて

28. "Present" Form. “wish”の次に來る名詞文句に於いて“Present” Formを用ふる時は、全文は現在界又は未來界に關する願望を表はす。例へば

- (1) I wish my brother *make* good time with him.

—Shakespeare, *Cymbeline*, IV. ii. 108.

(どうか見さんがあの男と工合良くやつてくれますやうにと祈ります)

- (2) I wish that this matter *be disposed* of with as little scandal as may be.

—Doyle, *The White Company*, I.

(此事件は出来るだけ穩便に片付けたいものだ)

の如く、又、次のも同列に考ふべき例である。

- (3) It is my wish that it *remain* where it is.

—Anstey, *A Fallen Idol*, VII.

(それは其儘にして置きたいのぢや)

而して、此最後の例は §90 に説くところと密接なる關係あり、其點に於いて叙想法全體の統合的理解を得んとするもの、特に注意すべきものである(尙、それと同時に次節の例 (9), (10) 並に §91 を参照することが有益である)。又、等意又はそれより派生した例

ましては、

- (4) I hope he *be* in love.⁽¹⁾

—Shakespeare, *Much Ado*, III. ii. 17.

(戀をして居るのでせう)

- (5) Send for her, and have her back; I desire that she *come* back.⁽²⁾—Thackeray, *Vanity Fair*, XVI.

(彼女を呼びにやつて歸らなさい。私はあれが歸ることを欲するのです)

の如きが擧げられ得る。但、“desire”, “hope”等の次には近世では叙實法又は may, shall, will 等に不定詞を添へた形が最も普通である。⁽²⁾ 例へば

- (1) I desire that it *may* not *die*.—Burton's *Diary*.

(死なせたくない)

- (2) I desire you *will* go to his lodgings immediately after dinner.—Smollett, *Roderick Random*, XLV.

(私は食事がすんだら直ぐにお前に彼の宿へ行つて貰ひたい)

- (3) I do not know what defence you will attempt—I hope you *may be* successful.

—Besant, *The Orange Girl*, II. x.

(私はあなたがどんな辯解をしようとせられるのかは知りませんが、御成功を望みます)

(1) “hope” は言ふまでもなくその原義が弱められて居るが、尙此處に入れることが出来る。但、此處に現はれる “be” は或は Shakespeare に時々現はれ、今日でも英國西南部地方言に残つて居る叙實法の be であるかも知れないといふ保留だけはして置く。 Cp. also: I think he *be* composing as he goes in the street.—Jonson, *Poetaster*, III. i.

(2) “desire” につゞくものに就いては尙 39-40 参照。

- (4) I hope to goodness he *won't come up*.
—Wilde, *An Ideal Husband*, IV.

(どうぞ彼が來ませんやうに)

- (5) I hope I *shall never have* any doubt of your worth-
iness.—Hardy, *Jude the Obscure*, III. i.

(私はいつまで経つてもあなたの眞實といふ點に
就いては露程も疑ひたくありません)

- (6) I hope that he is not seriously *hurt*.
—Dean Farrar, *The Three Homes*, III.

(重傷でないことを希望します)

の如くであるが、此内、*may* を有するものは明かに相當句を以て目すべく、*shall*, *will* のは所謂 Future Tense であるが、それが如何に叙想法と緊密不可離の性質を有するものであるかは既説に依つて明かであらう。又、叙實法のものの中には比較的新しい用法であるが、これは近代人の考へ方が具體的命題を擇ぶ様になつた結果盛んになつた⁽¹⁾ものゝ考へられる。尙、本節注目の主要動詞たる “*wish*” に就いて見るに、その次に純叙想法の用ひらるゝことは、近世英語に於いては最早あまり多くなく、主として次節に示すが如き相當句が使用せられる。

29. 相當句。主として *may* がその助動詞となり、主文の動詞が “Past Tense” 又はその系統に屬するものなる場合には *might* となる。例へば

(1) §52 等参照。

- (1) I wish your enterprize to-day *may thrive*.
 —Shakespeare, *Julius Cæsar*, III. i. 13.
 (貴殿の今日の企てが上首尾になることを祈ります)
- (2) You must have found it very damp and cold. I wish you *may not catch cold*.—Austen, *Emma*, II.
 (随分湿つぽくて寒いと思召したでせう。風をお引きにならないやうに祈ります)
- (3) I wish we *may never have* anything worse to reproach him with.—Borrow, *Lavengro*, XX.
 (もうそれ以上彼を責める悪い事の無いやうにと思ひます)
- (4) I'll bid you good day, and wish I *may bring* you better news another time.—Eliot, *Silas Marner*, VIII.
 (それでは御別れ致します。そしてこの次にはもつと良い事をお知らせしたいものと考えます)
- (5) We wish that one and the same hour *may take* us both from life, that I may not see her grave.
 —Bulfinch, *The Age of Fable*, VI.
 (吾々は二人が全然同時に死んで、私が彼女の墓を見る様なことの無いやうにと冀ひます)
- (6) I wish it *may not be* that impertinent recruiting sergeant.—Barrie, *Quality Street*, I.
 (私はそれがあの出しやばりの募兵軍曹でないやうにと祈ります)
- (7) I lay down between two ridges, and heartily wished I *might there end* my days.
 —Swift, *Gulliver's Travels, Brobdingnag*, I.
 (私は二つの畦の間に横臥して、其處で死んでしまひたいものだと思つた)

- (8) I wished fervently he *might* not discover my hiding-place.—Charlotte Brontë, *Jane Eyre*, I.

(私は彼が私の隠れ處を見付けないやうにと熱心に願つた)

の如くである。又、前節の例(3)に於けるが如く “It is my wish...” の構文に於いて眞の主語たる役を勤むる文句中に於いては “should” の用ひらるゝのが最も普通である。此 “should” は私の所謂『假裝叙想法』を構成するもので、本書に於いては §91 に説くところのそれである。今、一二の實例を挙げるこゝ、

- (9) It is their wish that Mr. Micawber *should* go down to Plymouth.—Dickens, *David Copperfield*, XII.

(ミコーバー氏がプリマスへ出向くことが彼等の願である)

- (10) It is Livvy's own wish that he *should* not be consulted.—Barrie, *Quality Street*, IV.

(彼に見て貰はないといふのがリヴィーから出た希望なのです)

等がある。(1)

30. “Past Perfect” Form. “wish” の次に所謂 Subjunctive Past Perfect を用ふるこゝ、その意味するところは多く過去界の事柄に關し、事實の反對なりしことを願ふ詮無き心を表はす。例へば

(1) 尙 §40 參照。

- (1) I wish some ravenous wolf *had eaten* thee!
 —Shakespeare, *I Henry VI*, V. iv. 31.
 (おれはお前が飢えた狼にでも喰ひ殺されたら良かつたと思ふわ)
- (2) I wish I *had not run* away from you now.
 —Watts-Dunton, *Aylwin*, I. ii.
 (私は今しがたあなたから逃げなかつたら良かつたにと思ひます)
- (3) Oh, how I wish I *had never seen* him!
 —Hardy, *Far from the Madding Crowd*, XXX.
 (おゝ、私は彼にてんから會はなかつたら良かつたと、どの位思ふか知れやしません)
- (4) I wish to the Lord I *had shot* him, but I spared him.—Doyle, *The Gloria Scott*.
 (私はやつを射殺したら良かつたと思ふのですが、實は助けてやつたのです)
- (5) I wish to goodness you *had let* me know!
 —Wilde, *The Importance of Being Earnest*, I.
 (君が僕に知らしてくれたら良かつたんだよ)

の如くである。又、これ等々等意の構文としては“(I) would…”があるが、それは既に §27 に若干の例を提示したから此處には再びしない。讀者、幸に注意を従文の動詞の方に移して参照せられたい。その代りに此處で是非とも注意する必要のあるのは、主文の省略によつて生ずる次の如き頻出の感動文である。

- (6) She proving false, the next I took to wife
 (O that I never *had!* fond wish too late!)
 —Milton, *Samson Agonistes*, 228.

(彼女が不審であつたので、次に妻としたのは一
 實はさうしなければ良かつた—といつても後の祭
 の愚かな願だ)

- (7) Oh! that she *had never darkened* our doors. Oh!
 that she *had never been born*.

—Miss Mulock, *John Halifax*, XXXIII.

(おゝ、彼女が一度も吾々の家の敷居をまたがな
 かつたんだつたら。それより初めから生れなかつ
 たんだつたらなあ)

- (8) Oh, that I *had but known*!

—Hall Caine, *The Deemster*, XVIII.

(あゝ、知つてさへ居たらなあ)

- (9) O that I *had had* the lightning in my hand
 To blind those stony eyes!

—Binyon, *Boadicea*, VII.

(あの石の眼を盲にする電光雷火が此手に欲しか
 つたことだ)

- (10) Oh! that I *could have climbed* those steps and
done that!—Watts-Dunton, *Aylwin*, I. ii.

(おゝ、私にもあの石段を登つて行つてあれが出
 來たんだつたら良いのになあ)

[注意] 尙、主文が "Past Tense" 又はその部類に屬す
 るものたる場合は、次節に關する同様の場合と共に、
 便宜上 §33 に譲る。

31. "Past" Form. 此場合その意味するところは多
 く現在の事實に反する事柄を希ふ心を表はす。例へ
 ば

- (1) I wish with all my heart she *were* well settled.
 But with such a father and mother, and such low

connections, I am afraid there is no chance of it.

—Austen, *Pride and Prejudice*, VIII.

(私もあれが立派に身を堅めて欲しいと心の底から思ふのですが、然しあんな人を父母とし、あの様に賤しいつゞき柄ではそんな見込みも少ないと思ひます)

- (2) I almost wish I *were* not a painter.

—Anne Brontë, *The Tenant of Wildfell Hall*, IX.

(私は繪描きでなかつたらと思ふ位です)

- (3) I wish I *knew* the rest of the words and the tune.

—Aldous Huxley, *Antic Hay*, V.

(残りの文句や曲も覚えて居たら良いのですがねえ)

- (4) I wish you *were* more at home, my boy.

—Galsworthy, *The Forsyte Saga, In Chancery*, I. v.

(私はお前がもつと家に居てくれたらと思ふ)

- (5) I wish we *had* a Mussolini.

—Galsworthy, *Swan Song*, I. i.

(此國にもムッソリニの様な人があつたらと思ひますわ)

- (6) It's no pleasure to me to sit up all night. I wish you *might* do it instead.

—Thackeray, *Vanity Fair*, XIV.

(夜通し起きて居るのはどうも感服しません。あなたに代つて貰へたらと思ひますが)

- (7) I wish ~~to~~ God that my mistress *could* hear you speak as I have heard you.

—Thackeray, *Henry Esmond*, I. xii.

(私の聞いた通りを奥様もあなたからお聞きになることが出来れば良いがと思ひます)

- (8) I will tell you what literature is. No—I only wish I *could*. But I can't. No one can.

—Bennett, *Literary Taste*, I.

(私は諸君に文學とは何かといふ事を御話します。いえ、それが出来ればと只管願ふのですが、實は出来ません。誰だつて出来ないのです)

- (9) This lady wishes you *were* her fairy.

—Barrie, *Peter Pan*, I.

(此方はお前をお附きの精にしたいものだと仰しやるのです)

の如く、類例としては

- (10) I cannot help expressing a wish you *were*—well, just a little older than you seem to be.

—Wilde, *The Importance of Being Earnest*, II.

(私はあなたが、さうですねえ—その何です、も少しお見かけよりお年が上でしたらと思ふと申さずには居れません)

等を擧げるここが出来。又、前節の場合同様に、主文の省略に依る次の如き用例も頗る多い。

- (11) O that my ways *were directed* to keep thy statute.

—*Psalms* cxix. 5.

(私の進む道をあなたの律法の守れます様に御指圖給はりませばとぞ)

- (12) O that I *could* soar up into the very zenith!

—Hawthorne, *Sights from a Steeple*.

(あゝ天頂へまでも舞ひ昇る力が欲しいものだ)

- (13) O God! that I *were* buried with my brothers!

—Shelley, *The Cenci*, I. iii. 137.

(おゝ御神、私も兄弟達と一緒に葬られて居たう御座りまする)

(14) Oh that you *could* stay longer, dear Rebecca!

—Thackeray, *Vanity Fair*, IV.

(おゝ親しいリベツカ、もつと永く居て貰ひたいわ)

(15) Ah, that it *might* never end, this passion, this marriage.⁽¹⁾—Lawrence, *England, My England*.

(あゝ、此情熱、此結婚の終ることがなかつたら)

又、これと等意の構文たる“(I) would…”の例は前同様、既に §27 に出たから、此處に更めて引く必要は無いが、時の關係を示す有益なる例として次の一文を指摘して置かう。

(16) Would that we *possessed* the power of our ancestor Prometheus, and *could* renew the race as he at first made it! But as we cannot, let us seek yonder temple, and inquire of the gods what remains for us to do.—Bulfinch, *The Age of Fable*, II.

(吾々に祖先プロミューシユースの力があつて、人類を彼が初めに造つた様に更新出来たらばと思ひます。然しそれは叶はぬ願でありますから、さあ、向ふの神殿へ行つて外にどんな事が出来るか神々様に伺ひを立てませう)

[注意] 尙、主文が“Past Tense”又はその部類に屬するものたる場合は、他との關係上、便宜これを §33 に譲る。

(1) Cp. Oh, that we *may* be permitted to pass the remainder of our days here.—Ainsworth, *The Tower of London*, I. xvii.

32. ... would. 此場合の従文に於ける would は will の所謂 Subjunctive Past で、その形式に於いては前節の部類に屬するものであるが、その意味するところは多く未來時に關し、時に §29 に説いた「may+不定詞」の場合と近似の意に用ひられるが、その差異の明瞭なる場合に於いては、彼は『願はくは花の下にて春死なん』に於けるが如く、只管なる願望を表はすに反し、これは通常多少の危惧を含み、その極まる時は『山の端逃けて入れずもあらなん』の如きに接近する。⁽¹⁾ 今、若干の例文を引くこ、

- (1) I wish my Papa *would let me have a Pony.*

—Thackeray, *Vanity Fair*, V.

(お父さんに小馬が買つていたゞきたいなあ)

- (2) I wish she *would come.*—Eliot, *Adam Bede*, XLI.

(彼女が來れば良いのだがなあ)

- (3) I wish that you *would mind* your own business.

—Doyle, *The Great Shadow*, VIII.

(人の世話なんか焼いて貰ひたくないねえ)

- (4) I wish you *would not make fun of our friends before the servants.*

—A. & C. Askew, *The Baxter Family*, II. ii.

(召使達の前で私達の友達を愚弄することは慎んで貰ひたい)

(1) 而して“could”, “might”になると、屢、明かに業平卿の嗟嘆になる。

- (5) I wish he
- would arrive*
- at some conclusion.

—Wilde, *The Importance of Being Earnest*, III.

(何とか彼が決論に到達すれば良いが)

- (6) I wish you
- would speak*
- to Tommy Trafford.

—Wilde, *An Ideal Husband*, III.

(あなたからトミー・トラフオドに言つてやつていたゞきたいですわ)

等、殆んど舉例の煩に堪へない。尙、次節参照。

33. *wished*... §§30-2 の場合に於いて、主文の動詞が“Past Tense”又はその部類に屬するものたる時、従文の動詞は變化しない。即ち、例へば或場合に於いて

I wish I *had seen* the sight.I wish I *were* a bird.I wish he *would come*.

と言ふべき事柄が、回想の陳述となつて主文の動詞が“*wished*,” “*had wished*” となつたとしても、全文はそれが變るだけで、従文の動詞は依然として夫々、*had seen*, *were*, *would come* のまゝである。今、若干の例文を引くこゝ

- (1) He
- wished*
- he
- had brought*
- his revolver.

—Bennett, *The Grand Babylon Hotel*, III.(=He said to himself, “I wish I *had brought* my revolver)

(彼は拳銃を持つて來たらば良かったと思つた)

- (2) I had often wished that I *had been drowned* when I was going away from my mother.

—Eliot, *Daniel Deronda*, I. iii.

(私は母の許を去つた時に溺死したら良かったと思つたことでした)

- (3) I wished I *could have seen* her.

—Miss Mulock, *John Halifax*, XX.

(私は彼女に會へたんだつたらと思つた)

- (4) She wished the matter *were* one of more general observance than it was.

—Butler, *The Way of All Flesh*, XVI.

(彼女は其事が實際よりもつと一般に行はれて居たら良いのにと思ひました)

- (5) He wished to God he *were* sober.

—Aldous Huxley, *The Moonc*.

(彼は其男が酔つて居なかつたら良いのにと思つた)

- (6) Nancy wished more and more that Godfrey *would come in*.—Eliot, *Silas Marner*, XVII.

(ナンシーは益ゴッドフレイに歸つて来て貰ひたいと思つた)

- (7) I wished that my father *would give* me his blessing.

—Borrow, *Lavengro*, XXII.

(私は父に祝福して貰ひたいなあと思つたのです)

の如くである。これは一般周知の事で、今更事々しく言ふ程の必要も無いが、只一つ注意するに足る事は、§28に説いた構文に於ける従文の所謂 Subjunctive Present は、主文の動詞が“Past Tense”又はその部類に

屬するものなる時、これに引かれて所謂 Subjunctive Past となるが故に、上例(4)の如きは、場合によつては be の變化したものであるか、或は元來の were が其儘に保留せられたものであるかの識別の出來難い不便のあることである。但、近世英語に於いては、§28 の構文は已に常用でなく、多くは §29 に示した言方を用ふるが故に、主文が “Past Tense” 又はその部類に屬する動詞を述語とする場合にも、多くは §29 後半に例示した形式に依つて「might+不定詞」を用ひ、又、時には would の構文を使用する (§32 参照)。

34. 叙實法 “wish” に對しては上記の如く叙想法又はその相當句を用ふるのが一般に正しいと言はれて居るが、然し、普通の口語に於いては叙實法の用ひらるゝところがあり、特に §31 の場合にはその例頗る多く、時に文語の中にすらその例を見る。今、若干の例を摘出すれば、

- (1) I wish, said the notary (throwing down the parchment) that there *was* another notary here only to set down and attest all this—

—Sterne, *A Sentimental Journey*.

(公證人は書類をつと下に置いて、此處にも一人公證人があつてこれだけの事を書付けて證明してくれたらと思ひますと言つた)

- (2) I am sure I wish I *was* one of that class, and had

it in my power to offer you even a small relief.

—Sheridan, *The School for Scandal*, V. i.

(私は自分が其階級の人間で、あなたにたとへ少したりとも御力添へをして差上げることが出来たらと眞實思ひます)

- (3) O mercy!—now—that I *was* safe at Clod Hall! or could be shot before I was aware!

—Sheridan, *The Rivals*, V. iii.

(南無三。むゝ。自分の館に無事に歸つて居りたい。さもなくば知らないうちに射たれてしまふことが出来ればなあ)

- (4) I now wish with all my heart I *was* back again.

—Ainsworth, *Old Saint Paul's*, III. vii.

(今となれば全く心から歸つて居りたく思ひます)

- (5) Oh me! I wish my elder son *was* here.

—Borrow, *Lavengro*, XXVII.

(あゝあゝ、長男が此處に居ればなあ)

- (6) Winnie, don't you wish I *was* a Welsh boy?

—Watts-Dunton, *Aylwin*, I. iv.

(ウイニー、私がウェイルスつ子だつたらと思ひませんか)

- (7) I wish it *wasn't* Sunday.

—Hardy, *Far from the Madding Crowd*, XIII.

(日曜でなかつたらいいのだが)

- (8) I wish there *was* only one dialect, all the same.

—Hardy, *Jude the Obscure*, I. vi.

(それでもやつぱり言葉が一つきりしきや無いのだつたらと思ふ)

- (9) Honestly I wish I *wasn't*, but I am.

—Bennett, *Buried Alive*, X. iv.

(全く私がさうでなかつたらいいのだが、實はさうなのだ)

- (10) I wish to the Lord, Mr. Wilson, that I *was* a red-headed man.—Doyle, *The Red-Headed League*.

(ウイルソンさん、私は髪の色が赤かつたら良いのと思ふのです)

- (11) Oh, how I wish I *was* not going out to dinner to-night.—Barrie, *Peter Pan*, I.

(おゝ私は今晚晩餐に行くのぢやなかつたらとどの位思ふか知れやしません)

- (12) Then I wish I *was* a fool.

—Phillpotts, *Buy a Broom*, I.

(それぢや私も馬鹿になりたい)

の如き數多き中の少數である。而して、斯の如き用法は或は十七八世紀のものであると言はれ、⁽¹⁾ 或は特に十八世紀の口語であると言かれて居る⁽²⁾ が、私の考では一概にさうは言ひ難いので、只、最近世に於いては學校教育の結果としてこれを誤りとし、叙想法を正當なりと認め、意識的に叙實法を用ふることを差控へる習慣を造つた人が多くなつたといふだけで、實際自然の言語に於いては、教育ある人々の

(1) For the singular, the indicative form *was* was common in 17-18 c.; it was even used for the plural by writers who used *was* in the plural indicative.—*N.E.D.* (under *B*, III, 7).

(2) In the colloquial language of the last century there was a tendency to substitute *was* for *were*, even in clauses of rejection.—Sweet, *A New English Grammar*, Pt. II, p. 108 (§2268). 因に此書は1898年に書かれたものである。

口からでも此用法を耳にすることが少からずある様である。而して、此用法が盛んになつた原因の一つは、再三説いた如く、元來 “Past Tense” なるものは、その半面に於いて叙想法を極めて接近したものであり(主として §§14-5 参照)、又、一方 to be を除く他の動詞の場合に於いては、音韻の變遷も手傳つて「叙實」「叙想」の兩叙法の語形上の區別が喪失し、その結果として昔叙想法なる特殊語形を用ひたところに、叙實法と同一なる語形を用ひ、然も實際の效果に於いては毫末の不都合をも生じない爲、益此用法の流行が助勢せられたものさ考へる。尙、此用法に關して最後に注意すべきは、was の方が were よりも屢強勢的であるといふ Jespersen の説⁽¹⁾で、氏は

The captain says he wishes I were black; I wish I was.—Marryat, *Percival Keene*.

(船長は私が黒かつたら良いのにと申しますが、私も自分でさう思ふのです)

等を引いて考察を呼んで居るが、別にその理由は説明して居ない。私の考では其様な場合には、そこに陳述せられて居る事柄が、言者の腦裡に於いて一先

(1) Not infrequently *was* is shown by the context to be more emphatic than *were*; cf. for instance the passage just quoted from Marryat; etc.—*A Modern English Grammar*, Pt. IV, p. 129 (§10. 1(2)). 尙、*The Philosophy of Grammar*, p. 267 に於いては氏は “... *was* is decidedly more emphatic than *were*” と言つて居る。

づ現實であるかの如くに見られ(wasに強勢をつけて言はれ、又讀まるゝこゝは勿論である)、そこにその思想が徘徊するからで、これ等も Tense を本來「時」の區別を表はすものとする従來の考では説明の出来ない事の様思はれる。次に、§30 の場合は如何といふに、此場合は凡ての動詞に於いて「叙實」、「叙想」の間に語形上の差別無く、吾々は只その歴史に鑑みてあれを叙想法と見るだけであるから、此場合叙實法代用の問題は起り得ないわけである。然るに、此處に特に注意するに値する用法は次の如き語法で、これは決して頻發の例ではなく、且又、最近世の例は私の手許に無いが、その意味するところは §28 に説いたところに近く、然も著しく §30 の場合にも近いと見るべきである。

- (1) He is certainly bewitched: I wish the old hag upon the green *has done* him no mischief.

—*Monitor*, XXXV.

(彼は確に魔法にかゝつて居る。あの緑野の老婆が彼に害を加へたのでなければ良いが)

- (2) “Grumbler? not I,” said Peterkin; “what pleases other people, will always please me. Only I wish we *have not got* King Stork, instead of King Log.”

—Scott, *Quentin Durward*, XXI.

(「小言言ひと仰せられますか、どう致しまして。他の人の氣に入るものならば私も亦満足なので御座

います。只、慾の間違ひになる様では困ると思ふだけで御座います)

(β) 祈願せらるゝ事柄を表はす
文句に於いて

35. "Present" Form. 多少形式張つた言方に於いて保存せられて居るだけであると言つて差支へ無く、多くは "God grant..."; "Pray Heaven..." 等の次に於いて用ひられる。而して、此場合前に grant の如き叙想法のあることは注意すべきで、次に來る叙想法は一面これあるが故に保護せられた貌で今日まで遺存したものご解せられ得る (§42 参照)。今、若干の例を示せば、

- (1) Heaven grant it *be* a better one.

—Hawthorne, *The Scarlet Letter*, XX.

(それがもつと良いものでありますやうに)

- (2) God send we *be* all better this day three months.

—Goldsmith, *The Good-Natured Man*, I.

(三月後の今日あたりには吾々皆好くなつて居ますやうに)

- (3) God grant it *be* not upon Tower Hill.

—Kingsley, *Westward Ho!*, I.

(その死といふのが塔丘での所刑の死ではありませんやうに)

- (4) God grant that he *be* not *deceived*.

—Stevenson, *Dr. Jekyll and Mr. Hyde*, VIII.

(彼の考に間違の御座いませんやうに)

- (5) I pray thee, Cardinal, that thou *assert*
My innocence.—Shelley, *The Cenci*, V. ii. 58-9.

(樞機の御方、どうか私の無罪を御確言下さいませ
するやうに)

の如く、又、次の如きも略同列に考へてよい。

- (6) Pray Heaven it *have not given* us the plague.
—Ainsworth, *Old Saint Paul's*, III. iii.

(その爲に吾々が病魔に犯されたといふことの御
座いませんやうに)

但、近世英語に於いては、斯の如き場合、多くは次
節に示すが如き相當句を使用する。

36. 相當句。こゝに用ひらるゝ助動詞は *may* で、
それは言ふまでもなく §23, (a) 及び §29 に出たもの
と全然同一の意義に立つものである。今、若干の例
文を引くこゝ、

- (1) Heaven grant they *may be* both the better for it
this day three months.⁽¹⁾

—Goldsmith, *The Vicar of Wakefield*, XII.

(どうか三月後の今日になつたらその御蔭で彼等
が二人共好くなつて居ますやうに)

- (2) Heaven grant you *may not have* cause to repent it.
—Ainsworth, *Old Saint Paul's*; I. iv.

(あなたがそれを後悔なさることの御座いません
やうに)

(1) 前節の例(2)比較。同じく Goldsmith の文である。